
白黒写真

神狩夜アイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白黒写真

【Nコード】

N4192J

【作者名】

神狩夜アイ

【あらすじ】

僕の部屋には「僕」がいる。

「僕」は僕を見て、笑っている。

静寂にメスを入れるような、部屋のドアをノックする音で目が覚めた。

「勇ちゃん、また寝てるの？ あ、しかも制服のままで。いくら疲れてるからって、太陽の出てるうちに寝ちゃ駄目よ。もうすぐ晩御飯なんだから」

母の声に反応して寝返りをうつと、枕の横に積んである文庫本に肩がぶつかる。漬物石の如く重い瞼を持ち上げると、ドアを開けて眉をひそめている母が横向きで目に入る。安眠を妨害した声ほど、人の耳にかしましく聞こえる音源はない。

貧血でかすむ目を左手で抑えながら枕から頭をあげて、寝てないと枯れた声で唸った。

ごみ箱に捨ててある、一ページ残らず引き裂かれ暴言が落書きされているノートが見つからないかどうか、それが心配だった。

母の短い溜息が部屋に響く。

「ばつちり熟睡してたくせに。そろそろ受験生の自覚を持って、毎日ちゃんと勉強しないと駄目だからね。落ちても知らないから」

「うるさいなあ、分かってるよ！」

僕は右手を横に薙ぎ払い、部屋を出て行くよう促した。母は一瞬顔を大仰にしかめ、何かを言いたそうに口を金魚の如く開け閉めしていたが、やがて黙ってゆつくりドアを閉めた。階段を降りる足音に交じって、母と父のやり取りがかすかに聞こえる。

耳障りな、ガラスを擦り合わせる音に似た声。

どうせ、僕の反応のことで期待して自爆した悲劇を二人で愚痴り合っているんだろう。

両親を僕の船に乗せた覚えはないが、安全運転の保障など最初からなかったはずなのに、気付かなかったのだろうか。金輪際沈まないと謳われた豪華客船すら冰山一つで海底に消えたほどだ、この世に

親の期待に完璧に答える子供の方が少ないかも知れない。

僕は再び枕に突っ伏し、顔半分をうずめてぼんやりと片目で毛布を見つめた。空気が湿っているせいか敷布団に弾力がなく、体を投げ出してもベッドのスプリングがきしむ音だけ響いて気持ちよくバウンドしてくれない。せっかく念願のベッドを手に入れたのに。息を吸い込むと、枕に染みついた自分の髪の毛の匂いが肺いっぱいに広がった。

机の上に並べられたニコンの一眼レフとそのフィルムケースが、消えかかっている夕日の光にぼんやりと照らされて逆に不気味な雰囲気醸し出している。棚の上のプラモデルすら、暗すぎて輪郭が分からない。

時間が経つごと、深い紺色に染まっていく部屋。街灯が点き、月光と一緒に窓から差し込んで室内を照らす。窓枠の形にトリミングされた光。青白く、病的な月の光。昔の人々が憧れた光にしては、ずいぶんと温もりに欠けた色をしている。

けれど、僕はこういった落ち着いた光の方が好きだ。太陽の光は時に眩しすぎて人の目を眩ませるから。可視的な淡い光、色のある光。きつと僕は聴力を失っても、色だけで世界のすべてをこの手に丸抱えすることが出来るに違いない。それほど世界は単純だ。シンプルすぎて、しかし飽きが来ない。白と黒の二色だけでも僕は十分に新しい世界を構築することが出来るだろう。

腕を顔の前まで持ってきて時計を確認すると、もう夕方の六時だった。学校から帰ってきてそのまま疲れて眠ってしまったので、すでに二時間が経過していることになる。ほんの少しの貧血と頭痛。授業中の居眠りもそうだが、ちょっとした不貞寝でも体調を崩しかねない。

これで一応、高校受験生なんだけどなあ。

僕は閉じかけた瞼に鞭打って強引に解錠し、体を起こした。制服が皺まみれになり、カラーが食い込んでいたのか首が少し痛い。いっそ、今度から昼寝は全裸の方がいいのかも。学校から帰ってすぐに

夕食まで眠るのはもはや日課になっているので、今更どうこう言う必要はない。

僕が学ランを脱ぎ、続いてシャツの裾に手をかけた時、背後から乾いた笑い声が響いた。手を止めて数秒考えたあと肩越しに振り向くと、『僕』が枕の上に胡坐をかいて、目の端に涙を滲ませながら笑っていた。

馬鹿にしているのか、単に面白かっただけなのか。『僕』の笑い声は妙に不快だ。納豆を混ぜる時の音と似たような粘着性がある。

僕は唇を尖らせ、学ランを着たままの『僕』を睨みつけた。

「何を笑ってるんだ」

眉をひそめて抗議すると、『僕』は僕と同じように学ランを暑そうに脱いで、なおも笑いながら「いやいや」と手を振った。

「寝ぼけてたとはいえ、鬱陶しそうに手を横に払うのが間抜けっぽくてさ。小学生じゃないんだから」

「しょうがないじゃないか。最低限まで言語を削ってなお己の意志を伝えるにはジェスチャーが一番。あの場で、寝起きのぼけっとした頭でごちゃごちゃ言うよりも、ああやる方が早い」

「へいへい、屁理屈はお腹いっぱいですよ」

「あーもう」

僕は『僕』の腹を何度か足蹴にして、言葉より雄弁なジェスチャーで「うぜえ」の意を示した。げしげし蹴りつけられつつも笑い続ける彼にいい加減飽きた僕は、そのまま汗臭いシャツをひっくり返しながら脱ぎ捨て、洗いざらしの派手な柄のシャツに着替えた。

『僕』は学ランの下に僕のものと同じシャツを着たまま、それをばたばた仰いで風を送っていた。僕と同じように脱げばいいのに、こいつは何を考えているのか時々分からない。

音もたてず『僕』は軽やかな足取りでベッドから降り、僕のスクールバッグから手帳を出して今週の予定のページを確認した。しばらくそっしていた後、大胆不敵に笑って振り返った。

ああ、こいつのこっぴつい笑い方は嫌いだ。心の底から人を小馬鹿に

したような笑み。部屋が暗いから余計にいやらしく見える。こうい
うとき、僕は『僕』が結局は僕と同一であるということを拒絶した
くなる。

「そういえば、明日は英語の小テストなんだっただな」そいつは手帳
のウィークリーページをひらひらと見せびらかしながら、挑発交じ
りに言いやがる。「不貞寝なんかして大丈夫かよ」

「何とかなるだろ。教科書の単語を丸暗記すればクリア出来るよう
な、テストが終わった次の瞬間には綺麗さっぱり脳内からオールイ
ースされるようなもんだし」

「余裕ぶっこいちゃって。何なら明日は俺が学校に行こうか？」

「よせよ、お前が学校で僕をやっても、勘のいい奴は気付くんだ
よ。何度も言うけど、他のみんなが知ってる『勇太』は僕であって、
お前じゃない」

『僕』の手から手帳をひたたくてそれで彼の頭を軽く叩くと、先
刻の僕のようにつんと口を尖らす。何が面白くてこいつは学校に行
きたがるんだろう。僕が学校にいる間に昼寝でもゲームでもマスタ
ーベーションでも、何でもしていればいいのに。

僕ははまだ『僕』を学校に行かせたことがない。みんなはきつと普
通に僕だと思つて彼に接するだろうが、何せ根が違うのだ。敏感な
連中に嗅ぎつけられるのが怖くて、結局僕は彼の存在を認識しつつ
表には絶対に出さない。

おそらく、僕以外の誰一人として『僕』を見たことがないだろう。

彼自身は衆人觀衆の目に晒されたがつているのだが、僕がずっとそ
れを制してきた。彼が世俗のスポットライトを浴びることはすなわ
ち、僕の崩壊、僕と『僕』の再度の結託を意味する。金輪際御免だ。
僕は『僕』から奪い取ったスケジュール帳を再度確認し、ため息を
ついた。どうせ今から勉強したって、何にもならないのは分かつて
いる。その場限りの付け焼き刃な丸暗記なんて、結局数ヶ月後の受
験の時には見事に忘れてしまうだけ。

けれど、今の僕にはこれしかないような気がした。

僕は僕のことが一番よく分らないのに、『僕』だけがまるで僕のことを知り尽くしたように隣で笑っていやがる。粘ついた声。薄暗い部屋の中で『僕』は笑う。笑う。封じられたことが自分の思う壺であるかのように。

「ちったあ勉強したほうがいいぜ？ お前は結局『お前』であつて、俺じゃないんだからさ。自分だけ見ていれればいいんだ。いちいち鏡に映る正反対の自分を覗き込んでため息をつく必要はない」

「だったらお前が僕の代わりに学校に行ってくれよ」僕は振り向きざま、腕を組んで笑い続ける『僕』に怒鳴った。「勉強もしないで家で呆けてばかりで、いい御身分じゃないか」

「知ったことじゃない。俺を一番外に出したがないのはお前じゃないか」

それもそうだ。僕は反論できず、ぐつと唇を噛みしめる。

机の上の一眼レフに目をやった。カメラは昔からの趣味で、好き勝手に好きなものを撮っては現像してアルバムに入れている。カメラの横に転がっている無数のフィルムケースの傍に手をつくど、いくつかのケースが転がってからりと音を立てた。受験勉強に身が入らない元凶の一つなのに、いつまでもいつまでも大事にしてしまっている。

一階から声が聞こえた。完全には聞き取れないが、どうせ母が夕食に来るよう催促しているのだろう。僕は軽く舌打ちし、『僕』に背を向けて部屋のドアを開けた。元よりイラつく受験中に仲良し家族ごっこをするのは嫌だが、そうしないと僕は壊れてしまう気がするから、僕はいつでも二階へと上がってくる両親の足音に怯えながらもこの家にいる。どうしても好きになれない空気というのは、どの動物にだってあるものだ。

「人間っていうのは、大概において動物的だからな」

背後からヒヤリと冷えた声が響き、反射的に足を止めた。振り向かなくても『僕』が不敵な笑みを不気味に浮かべていることは容易に想像がつく。何かを言おうと口を開きかけたが、無理やり歯を噛み

しめて閉じ、部屋を出ていこうとした。

「待てよ」

殊更強い念を含めた声が再び僕を立ち止まらせる。いい加減何か怒鳴りつけてやるうかと振り向いた時、『僕』の顔は鼻先が触れ合うほど近くにあった。近い。至近距離。見開いた両眼がピントを合わせて中央に寄る。僕の心臓は一気に氷点下まで冷える。ひつ、と狭まった喉から声が漏れ、肩がすくみあがる。

口裂け女のように吊りあげられた『僕』の口角。弱みを握った悪魔のような気色悪い笑み。湿る空気。彼の顔に、ドロリと溶解してしまいそうな不気味な空気が塗りたくられている。

彼の顔が近づき、近づき、ついに互いの額が触れた。ざらりと前髪がこすれあう。

「いいね、お前はいつもそうやって俺の所作の一つ一つにびびってくれる。いつ自分の制止を聞かずにこの部屋を飛び出すか、怖くしょうがなかったんだろ。自分で封印したはずのものは鍵が緩いもんさ」

「出てくんないよ」僕は恐怖を押し殺して呟いた。「まだ出ていいとは言ってない」

「さつきは学校に行けって言ったくせに」

「それとこれとは別の話だ」

「ふーん、どこがどう別なの？ ていうか、どっちなのかはつきりしたらどうなんだよ。自分でもちゃんと答え、出してないんだろ？ 俺を世間に見せびらかしたいのか、大事に隠しておきたいのか」

「うるさい、黙れ」

「反論できないんだねー、可愛いそうに」

僕は肺から喉までせり上がってくるどうしようもない衝動に耐えかねて、無意識に『僕』を突き飛ばした。おっと、と一歩後退しただけで『僕』はほとんど今いる場所から動いていない。その代わり、僕が廊下の壁に背中を打ちつけた。派手に鈍い音が響き、僕の鼓膜を一瞬深く犯した。

一階のリヴィングのドアが開く気配がする。

「勇ちゃん、何してるの？ 騒々しいわね」

同時に煮物っぽい匂いが二階まで立ち上ってくる。僕はもう空腹を感じられないほどに全身が緊張していた。顔がかつと熱くなり、心臓が暴れだす。脳を直接えぐられているような感覚。しびれてうまく動かない右手を顔の前に持って来て、しばらく見つめたあとその手のひらで目を覆った。口を半開きにして必死に酸素を取り込もうとする。茫漠としたヴィジョン。焼き増しされた写真の裏側。そこで僕をずっと、飽きもせずずっと、こいつはずっと見ていた。みつともない姿の僕を『僕』は、今もなお、見ていた。皮膚が切り裂かれるような冷たい風に研がれた、鋭い目つきで。僕が忘れることを許さないように。僕の記憶に永遠に寄生して、徐々に体液を吸い出すように。

ああ、神様。僕はこの十五年の人生で一度も信じたことがない横着者の名前を呼んだ。僕はもう、こいつを赦すことでしか救われないのでしょうか。

ずるずると壁伝いにしゃがみこんだ僕を、『僕』が僕の身長の高さから見下ろす。

「よく見てろよ」そいつはほんの少しだけ悲しそうな無表情で告げた。「これは一応、お前も俺も望んでたことなんだからな」

一階から悲鳴が聞こえたのは、その数秒後だった。『僕』はもう僕の目の前にはいない。僕はただ、廊下の壁に背を預けたまま座り込み、虚ろな目で床を見つめていた。長いことそうしていたから、床に放り出された自分の手の平の皺の数すら覚えてしまったかも知れない。

絶叫が響く。金属を逆撫するような声。正気じゃなかったらとくに抱腹絶倒ものの、これまで聞いたことのないような両親の絶叫。間抜けなもんだぜ、全く。

僕はこの場に立ち会ってなお、自分の身近で展開される事柄にさほ

ど興味を示していなかった。

崩壊が、こだまする。

刺身のような生臭い匂いが、煮物の匂いを押し切って廊下に充満する。空想の中できっとくにおき慣れてしまったはずの異臭。僕の中でその異臭がじんわりと溶けてにじみ、内臓と一体化する。

僕が望んだはずなのに。

不慣れな感覚。逃げ腰の心と求める身体。

しばらくして僕はゆっくりと立ち上がり、ゆるくカーブしている階段を一段一段、確実に踏みしめながら降りて行った。異臭が強くなる。僕の身体が、幻想の鎮痛剤を欲している。

考えた通りの光景が広がっていることを予想して、僕は閉じられたリヴィングのドアを開け放った。

そいつは僕に背を向けて、部屋我真ん中で仁王立ちしていた。

道で名前を呼ばれた時のような自然な動きで振り向いた『僕』の右手には、血まみれの包丁が握られている。それは『僕』の身体も同様に、僕のものと同じシャツにはべっとりと絵の具のような血が大量に滲んでいた。繊維が吸い込みきらなかった血がシャツの裾からぽたりと落ち、『僕』の足元に小さな血だまりを作る。

彼の足もとに転がっているのは、ただの大きな生ゴミ二つ。

僕の両親は真っ赤な死体になっているだけで、他に何も語らない。

僕も『僕』も責めない。きっともう、何も考えちゃいない。つづるべき言葉を喪失し、ぽっかり開いた空間を埋め尽くすように流れる血。

床で無様に四肢を投げ出す二つの死体からだくと深紅の血が無限に溢れる。フローリングの目に沿って、少しずつ血だまりを広げていく。僕はこれまで母と父が死ぬ光景を想像したことが何度かあったが、まさか現実で目の当たりにするとは考えもしなかった。衣服も髪も真っ赤に染められた二人。同じように真っ赤な『僕』。

それでも僕が冷静に考えることができたのは、『僕』ではなく、僕が両親を殺したのだ、ということ。

すべてが色を失っていた。月の光も、この部屋にはもう届いていない。けれどそれでいいんだ。光を集めた僕らは消えてしまうから。驚くわけでも、喜ぶわけでもなく入口に立ち尽くす僕を、『僕』はしばらく正面から見つめていた。血にまみれた彼の姿は妙に様になっでいて、表情にほんのり浮かぶ優しい笑みが逆に際立っていた。さっきまで僕を睨んでいた鬼のような嘲笑から一転、まるで子供が犯した小さなおいたを許すような笑みを浮かべる姿は、逆に気味が悪かったけど、何故かほっとした。ああ良かった、と。

きつと、その時は少なからず安心していったんだ、僕は。それでも僕は、立ち尽くしたまま、ぼんやりした目のまま、滲んだ景色を見つめる。僕を盾に、光を浴びることを知らなかった『僕』をただひたすら、見つめる。

やっぱりこいつには血が良く似合う、なんて思った。

「良かっただろ？」

『僕』はぬらぬらと電灯の光を反射する真っ赤な包丁を床に捨てて、ふわりと風に舞う羽のような笑みで言った。

「自分が、フィルムの中に閉じ込められるようなことにならなくて」

真っ暗な世界に閉じ込めた。

「明日の小テスト、結局どうすんだよ」

そいつは、病的な光を求めていた。

「今、この状況下でそんなこと、考えてる余裕あるわけないだろ」

例え光と共に消えてしまおうとしても。

「あっそ」

僕は光を浴びすぎたんだ。

「それより、お前こそどうすんだよ」

ひどいハレーションを起こしてしまったんだ。

それでも、僕は『僕』を自分の部屋から出したことはない。僕と同

じ光の下に晒したくない。

『僕』が白日の元に晒され消えてしまえば、僕もまた消えてしまうから。

部屋に一步入ると、ドア付近まで広がっていた血だまりに直接踏み込んでしまい、小さな水音と共にくるぶしまで雫があがる。僕の中に流れる血と同じ両親の血。二人分の血がフローリングで交わる様は、懐疑的でもあり、虚無的だった。今になっても僕は、何も感じていない。

僕とは床に転がる両親の死体を一瞥したあと、『僕』が床に投げた包丁を拾った。台所にある包丁の中で最も刃渡りの広いもの。使えなくなった刃から血が滴り落ちる。僕はそれを見つめ、ゆっくりと口を開いた。

「そんなに、お前はこの二人が気に食わなかったのか」

横目に映る『僕』は無表情で腕を組んだまま、どうだろうね、と言った。

「一応、俺たち二人がそうだった、ってことになるんじゃないの」

「本当にそうかよ。お前が僕の部屋に現れたその時から、僕は自分で父さんと母さんがうざいって思うようになってたけど、お前はむしろ後ろで笑ってばかりで、気に食う食わない以前に無関係だった気がするけど」

「それはお前の主観だろ？」そう言いながら、『僕』は大げさなため息をついた。「お前は俺だ。ていうか、むしろお前こそ俺に忠誠でも誓って欲しいぐらいなんだけど。俺は実際に殺した。お前がしなかったことを俺がした。そこに、どっちかに責任を押し付けるなんて不毛な行為は似合わないぜ」

そいつはまた僕の氣に入らない嘲笑を浮かべた。僕は真っ赤な包丁から目を離し、再び『僕』と視線を合わせた。両親の死体を挟んで何も否定出来ない。僕は否定するほどの立場じゃない。どう考えたって、僕より『僕』の方が立場が上なのだ。

僕が『僕』である限り、『僕』が僕を生みだした限り、僕はこいつ

を隠し続けてきた。己の消滅もいとわず光を求めるこいつを、僕は自分の部屋に閉じ込めた。誰にも、『僕』のことを知られなくなかった。

僕よりずっと、ずっと、何倍も、素直で自由なこいつを。

そのはずなのに、同時に、こいつを世間に晒したかったのかも知れない。

ケースの暗闇から出てきたフィルムは、光を浴びると消滅してしまう。そこに写した笑顔も、景色も、真実も、何もかも。

けれど、薄っぺらい紙の上に現像しなくても、記憶にいつまでも残っている光景がある。

最初に僕が『僕』の姿を目にしたのは、三年前、中学一年生の時だった。新しい学校、新しい環境、制服、難解な授業、人間関係。全てが混乱していて、それでいて道楽のよう。大人の階段を一步のぼった気でいる生徒達は、道楽に最大限興じるための餌を見つけ、喰い物にする。

僕がその格好の標的だったらしい。いつの間にか机の中の教科書に知らない落書きが増え、次に引き裂かれ、仕舞いにはゴミ箱行き。あまり穏やかではない内容の落書きは机にまで及び、油性ペンで女性器と男性器が並んで描かれてあったのが最初。昔のギャグ漫画のようなデフォルメされきった表情の三等身の僕が、舌を出して興奮しながら、同じように興奮している犬の性器に腰を打ちつけている絵が次。そのあとはあまり覚えていない。いちいち見るのも面倒だったし、新しい絵が書き加えられていたとしてもよほど芸術性が高いものでなければ興味がない。

問題になったのは二年に進級した時。学年が変われば現状も変わるだろうという僕の期待はもろくも崩れ、先生のいない昼休みに、女子も大勢弁当を食べている教室で公開オナニーをさせられた。数人の男子がエロ漫画雑誌を片手に、「これをオカズにシコレよ」と命

令した。僕は無理やりズボンを脱がされて教壇に膝をつき、女子の前で泣きながらオナニーをしていた。

これを女子の誰かが担任に告発したことがきっかけでしばらく何事もなかったが、進級すると途端にこれまでの鬱憤を晴らすようにひどくなった。中学性にとっては破格の金銭を要求されたし、一年生の女子を十人以上レイプしなければ両手足を折ると脅され、僕を的にしてシャーペンや刃の出たカッターナイフや火のついたタバコでダーツをされた。これ以上は語れない。覚えていないし、思い出したくもない。

そういった日々の中で、毎日「部活の練習が結構ハードで」と両親に言い訳しながらずだばろで帰ってきていた。親に話す意味が見つからなかったし、言うわけがない。プライドが許さない。

僕が『僕』と初めて会ったのは、そんないじめの連続の中で、いい加減死が頭をちらついてきた頃だった。

自殺を考えることは少なくない。悲観しているわけでも何でもなく、これまで僕を虐げていた連中の名前をフルネームで列記して遺書に書くか、ネットに流すか、報道機関に送りつけてから死ぬつもりだった。それぐらいのことをしないと、今度は化けて出て連中を呪い殺してしまいそうだ。彼らを家族ごと後悔させないといけない、ただそう思っていた。

けれど、その日、僕が部屋に入ると、僕と似た奴がそこにいた。

ベッドに座り、腕を組んで、ドアを開けたまま立ち止まる僕を正面から笑って見ていた。

僕に似た奴と言うよりも、そいつは『僕』だった。完全体ではなかったが、どこかに落つことした僕の破片の一部が巣に帰ってきたような、そんな感じだった。

それでいて、そいつとは初対面。けれど自己紹介は必要ない。

「こっぴどくやられたようだね」

奴はニヤリと確信めいた笑顔を浮かべ、僕を嘲笑った。そう、その時のそいつは僕を思いっきり上から見下していた。あとになって僕

がそいつと同じいきものなんだと気づいても、僕と『僕』の上下関係は変わらないし、違和感を持つこともなかった。

体中の血液が、『僕』の体液に汚染されはじめた瞬間。

その時、僕は僕の部屋で『僕』と出会い、僕が嫌ってしようがない『僕』の厭味な笑顔と出会い、無数の小さい針でちくちく刺されるような鬱陶しい粉塵に支配され、僕は僕を見失い始めた。

どうしてだか、無駄に冷静だった。

廊下を挟んだすぐ反対側の部屋では猟奇的な光景と鮮血の海が広がっているというのに、僕は呑気に洗面所で血まみれの手を洗い、『僕』は真っ赤なシャツとズボンを脱いで新しい服に着替え、部屋に戻った。

まだ血生臭い。生物臭というか、新鮮さを失った血液の異臭というか、そういう癖のある臭いがいつまでも残っている気がする。

一階に両親の死体を残して、僕は『僕』を今まで通りに部屋に戻し直した。家の中が殺人事件の現場になったこと以外、いつもと何も変わっていないように見える。

「軽くどうでもいいけど」僕はまず、自分の勉強机の前からガラガラと椅子を引っ張ってきて、ベッドに胡坐をかいている『僕』の目の前に持つて来て座った。「そこまでしてこの部屋を出たかった？」

「当たり前だろ？ 奴隷も投獄兵も自覚したくない感情も、強制されるとなおさら逃げなくなるもんだよ」

「あんまり理由になつてない気がする」

「ていうか、もういいだろ。我慢するのはやめな」我慢。こいつはまた同じようなことを言う。

僕は椅子の背もたれにギシギシ音が鳴るほど体重をかけ、視線を宙に浮かせる。夜の闇が深く濃くなり、電気を点けていない部屋はお互いの顔が見えないほど暗く沈みこんでいる。僕は『僕』と目を合わせまいとしていたが、無意味かもしれない。

僕は机の上に置いている包丁をもう一度見た。『僕』が両親を殺すために使った凶器。もう使い物にならないだろうその刃には、乱暴に拭ったせいで血がまだ少しこびりついている。

結局、我慢できなかったんだ、僕は。

その証拠は一階で血漬けになって雑魚寝しているし、『僕』が代弁者として僕の欲求を具現化した。ただ僕が直接手を下さなかっただけで。

鍵をひらいたのは、僕だ。

この部屋からこいつを逃がした時点で、もう僕に選択権はなかった。暴走した馬は止まらない。

「まあ、そうなんだろうな」

僕は椅子から立ち上がり、ベッドに座りこんでいる『僕』に右ストレートを見舞った。骨がぶつかり合う音が響き、手の甲が痛む。『僕』は顔が大きく反れ、口から血を吐きだす。どこかを切ったのかも知れない。僕の知ったことじゃないが。

右向きのまま数回咳き込んだ『僕』は、再び僕に向きなおってあの気色悪い笑みを見せた。確信犯的な笑み。全て見通していたようなニヤケ顔。

そして、僕が奴を殴った時と同じ個所を同じ方法で殴られた。頬骨や歯に響く鈍い振動。一瞬目が黄色く眩み、遅れて痛みを自覚する。顔が勢い良く反れたせいで首がやられかけた。

『僕』と同じように咳き込む。喉が狭まったような感覚。頬の内側が切れて口いっぱいに錆びた鉄の味が広がる。ぼんやりした視力が戻り、顔を正面に戻すと『僕』の不気味な笑顔が見える。

僕らの間に共有された痛み。殴り殴られる関係。僕らはずっとそうだった。痛みも憎しみも諦念も、この清々しいまでの薄ら笑いですら、僕らの間に齟齬はない。

「痛い」

僕は頬に手を添え、『僕』を正面から睨んでそう言い放った。自覚はなかったが、その時の僕は無邪気に笑っていたのかも知れない。

「俺も痛い」

そいつも笑って言った。お互い、口の端からよだれのように血を垂らし、笑っていた。いつも『僕』が見せるような人を嘲る薄笑いではなく、無邪気な、子供のような、屈託のない笑顔を。

僕らは結局、互いの元へ帰ってきたんだ。

落つことした破片を拾ってつなぎ合わせたんだ。

この部屋で初めて出会った日から僕らは同一で、けれど乖離していて、同じ線路を歩いた仲間のような腐れのない妙な絆が、この三年間の間に構築されていた。

「みつともない話だな」そいつは机の右端のティッシュ箱から真っ白なティッシュを二枚抜き取り、口の端を拭った。「俺とお前はいつだって、互いに反発してるものだと思ってた。でも結局、こうして俺たちは結託するしかない。骨の髄まで、血の一滴まで、肉の一片まで喰らい合った仲だ」

「僕はお前をこの部屋に閉じ込めて一人で放浪してたけど？」

「そんなもの、人間だったらやって当然のことじゃねえの。誰だってそうだよ。自分が今感じてることや見ていること、思ってることだけが自分のすべてで純粋な真実だと本気で信じて何も見えていない馬鹿共が、お前や俺と同類ってこと。見えないものは全部嘘か、もしくは逆に本性だと思ふもんさ」

「そこまで僕がひどい男だって考えたことはなかった」

「鈍い男め」そいつはまた僕を馬鹿にしたように笑う。

「もう忘れないよ」

「嘘つけ」

「嘘じゃないさ」

僕は踵を返し、部屋のドアを開けた。廊下の明かりが室内に差し込み、黄色く細いレーンを作る。その光を顔半分で受け止めた『僕』は、本当かよお、と文の中央にストレスを付けて呟いた。

部屋のドアを閉め、『僕』を視界から遮断する。こうして奴をこの部屋に閉じ込めて外に一切出さなかったけど、もう無駄だろう。勉

強机に放置していたケースが叩き割られ、フィルムが引き出される。偽善と欺瞞に満ちたジブシラシサだのジュンスイナキモチだのオモイヤリだのといったくそ眩しい人工の輝きに晒され、感光したフィルムたちは砂糖のように甘く溶けだし、液状化する。手の中で愛らしく腐ってゆくそれに優しくキスして、口の中に流し込む。歯を、舌を、喉を、焼けつくような痛みが襲っても、僕はもう恐れない。残らず肉片を食いちぎられても僕はそいつの名前を呼ぶだろう。暗室の中で、記憶の欠片を定着させていく写真と一緒に吊り下げられた、僕がずっと大事にしているお人形さんの名前を。乾いた音を立てて転がるフィルムケース。割れるレンズ。全ての写真がピンボケしていて、もはや僕には判別が出来ない。

朝、僕を一階から呼ぶ声があった。

いつもと変わらない両親。リビングの朝食の風景。一瞬は茫然としたものの、すぐに二人に笑いかけて「おはよう」と言った。

朝食を囲み、新聞の一面トップを飾るニュースについて雑談を交わす母と父を眺めながら、変革は表裏一体ものだ、と思った。僕の部屋の封印が解けたことにこの二人は気付いていない。否、最初から何も知らない。

「勇ちゃん」

学校に行くために玄関で靴を履いていると、母が後ろから声をかけた。振り返って彼女を仰ぐ。

昨夜、『僕』が殺した、けれど何も変わらない、僕の母。

「学校で何かあったの？」

「どうして」僕はあくまで冷静に答えた。

「最近、元気ないみたいだし、友達の話もしないし。何か悩みでもあるのかなあって、ちょっと心配してるのよ」

「別に何もないよ。僕、あんな学校でも割と気に入ってるから」

今は。

母は深く詮索することなく、僕を送り出した。ドアを開ける音と、いつてらっしゃい、という母の声が重なった。薄っぺらい靴底が、僕の体重を丸ごと支えてくれている。

命の重みなんて、本当は風船のように軽いのかも知れない。僕らが握ればすぐに壊れてしまうような、そんなもの。

相変わらず学校は荒れていた。

教壇の上に置かれたラジカセから「新世紀エヴァンゲリオン」のオープニングテーマが最大音量で流れている。音質が悪く、雑音が混じって余計に耳について気色が悪い。その音量に負けじとクラスの連中が騒いでいて、もはやお祭り騒ぎどころじゃない。七十年代のデイスコブームを彷彿とさせる。

僕は教室に入るのを一瞬ためらったが、ドアを開けっぱなしにしておくのも不自然なのでそのまま歩みを踏み出した。猛獣の檻に入るような気分だった。

やかましい声が一瞬止む。

が、すぐに再開された会話に僕への悪口が含まれる。

「来やがったぜ、ガイジの野郎」

慣れた侮蔑用語。僕は特に四肢に問題はないけれど、単なる相手への侮辱としてこの言葉が使われる。心を持たない、レベルの低い人間の言葉。クラス内ヒエラルキーをあれこれ難しく考えなくても、発する日本語のジャンル分けで簡単に人間のランク付けが可能だ。僕が上位の人間とは思わないが、こいつらほどじゃない。

「うつせえな……」

声には出さず、息だけで発音した。それでも連中には聞こえたらしく、空気が固まる。ぴたりと止む喧噪。凍りつく静寂。焦げ付くほどたくさんの視線が僕に集中している。

僕は何も思わない。

一瞬は驚いたが、これも当然の結果だと思つたし、覚悟の上で発言した。聞こえることも予定の範疇。

口の端をあげて笑う余裕すらある。そんな僕が大好きだ。今は。エヴァンゲリオンが間奏を歌う。神話が元になったというコーラスが高らかに響く。聖歌隊のような、神聖な声。神。

冷え切った空気の中で、僕に突っかかってきた奴がいた。

「おい、巳倉、いい加減に死んじまわねえ？」

このクラスで一番体格のかい男子。僕より頭ひとつぶんでかい。上から見上げるような格好で、鞆を机に置きかけた僕を見下ろす。わざとらしい下目づかい。普通に顔を下に向ければいいのに、何をカッコつけてるんだか、人はみんな目だけ下に向ける。これを怖いものだと認識している者だけが怯えているだけで、人間の首の関節の存在を知っている人間なら逆に笑ってしまう。

もちろん、本当に笑ったりしないが。

僕がちゃんと首ごと上を向いて彼を睨みつけていると、肩を勢いよく押された。その拍子に腰に机の端が当たり、そのまま椅子の方に倒れた。木がぶつかるものすごい音がして、体中に痛みが走る。

手出しをする人間は誰一人としていない。みんなその場に固まったまま、こちらの様子を窺うように視線だけ絶対に外さない。純然たる傍観者。

僕が無表情で何も考えず、ただその男子を見上げ続けていると、チツと舌打ちが聞こえてきた。

「まだ学校に来る度胸があんのか。やめときゃいいのに」

「やめる理由が特に見つからない」

僕は初めて彼に反論した。

「見つからない？」

「ああ、そうだよ」

「今よりさらに上乗せして痛い目見ないと、やめる気力すら起こらないのか」

「たぶん、ずっと起こらないと思うよ。僕は好きで学校に来てるん

だから」

「巳倉」その男子は思いつきり僕の肩を掴んで、ギリギリと締め上げた。「自分の意志つてものを持つてるのは優等生なことだがな、周りに迷惑をかけてるつていう自覚を持つて、最善の行動をとった方がいいぞ。人の反感を買うよりずっといい」

「迷惑つて？」

「お前の存在」

「ようするに死ねつていうことか」

「分かつてるんだつたらさっさとしろよ、迷惑してんだよ、お前が生きてんのが」

彼の語調がきつくなる。唾が飛んで頬に当たる。僕はそれでもなお、無表情で彼のことを見ていた。つまらない男、低レベルな男。

どうしてだろう。その感情には覚えがあつて、僕自身が直接感じたわけじゃないけれど、既に知っている。

知つていて、ケースの中に閉じ込めた。

けれど、それはもう真つ暗なフィルムじゃない。光を浴びれば消えてしまうような儚さと繊細さを持つているが、確実に、僕のオリジナルをもつて、一番鮮明に世界を映し出す。

単純に、モノクロで作られたこの世界を。

僕は笑つた。何も考えずに笑つた。いつの間にか意識しなくても勝手に表舞台に出てくる僕の感情。光を恐れずスポットライトを浴びる、僕が飲み込んだどろどろのフィルムたち。腐つていく、僕。

見下すような笑顔が気に食わなかったのか、その男子は思いつきり僕を床に叩きつけた。柔道部顔負けのプレー。頭を打ち付けた僕はクラクラする視界を振りほどき、立ち上がった。誰も手助けしない。それがいいだろう、今の僕には何も必要ないから。

僕には『僕』がいるから。

「知らなかっただろう？」

顔をあげてクラスメートを睨み、笑つた。余裕綽々の態度に、逆にみんなが言葉を失う。気分がいい。

僕の中で写真に世界が焼き付けられる。暗室でケースを叩き割って引きずり出されたフィルムたちが、僕の一眼レフに写った光景を真っ赤に染める。勉強机に放り出された、撮り溜めしてある写真たちが僕が忘れなかった、一生この肌に残る感情の数々を、僕は捨てなかった。黒いケースに三年間、大事にしまいこんでいた。蓄積されていく汚物の山を部屋に閉じ込めて、僕はただ、何も持ち合わせていない人間を演じていただけ。

それに気づいたのは、つい昨日のことだけだ。

僕はケースを両手で抱え込んで守りながら、その存在を忘れないでいながら、見て見ぬふりをしていた。

それだけの話だ。

他に何も無い。

今あるのは、空っぽのフィルムケースだけだ。

「知らなかっただろう？」

僕はもう一度クラスメートたちに尋ねた。みんな、僕が何を言っているのか分からない様子で当惑しているし、僕を殴った男子生徒に至ってはその場にぽつんと立ちつくしているだけ。

エヴァンゲリオンが、終わる。少年よ神話になれ。かすかなエコーを残して、MDの編集なのか続いてエリック・クラプトンの曲が始まる。……もし僕が天国で君と出会ったなら、君は僕の名前を覚えててくれるかな。空気にヒビを入れるギターの音色。妙に場にかわかない音楽。この曲の意味するところは違っても、なんだか僕にはしっくりきた。天国にはふさわしくないから。天国にはふさわしくないから。

フィルムケースが、割れる。

破片ごと踏みつぶし、僕はフィルムを引きずり出す。

一眼レフが記録した世界を、破る。

「何も面白くないんだな、こんなの」

僕と同じ声。

『僕』は僕の右隣に立って、両手を頭の後ろで組んでいる。

そいつはつまらなさそうに、昨日と同じように口を尖らせた。

教室内がざわめいた。巳倉がいるぞ、もう一人いるぞ、誰だあいつは、双子の兄弟なのか、いつの間に入ってきたんだ。姦しいざわめきが空気を揺り動かし、みなが一様に数歩引き下がった。

当たり前だろう。『僕』は僕と同じ服を着ているし、僕と同じ顔をしている。声も同じ。笑い方も同じ。背の高さも性器の大きさも、たぶん脳味噌の容量も同じ。二人並んで教室にいれば、もちろん誰だって驚くだろう。

こいつを部屋の外に出したことがないから、当然だ。

「いつかはこうしないといけないって、かなり前から思ってたよ」
僕はため息交じりに、隣に立つ『僕』に言った。

「本当かよ」そいつは肩をすくめて苦笑する。「俺の存在を隠して隠して、学校にも連れて行かせてくれなかったのはどこのどいつだ？」

「行かせたくなかったんだよ、昨日までは」

「そんな急に態度を翻すもんなのかねえ」

「人間って複雑な構造してるからね。脳味噌がでかすぎるんだよ」

『僕』は大げさにため息をついた。

「それにしても、ほんっとにつまんない奴らばかりだな。反吐が出る」

「そう言うだろうと思ったから、部屋から出したくなかったんだ」

「けれど、出した」

「うん、出した」

「好きにしていいいわけ？」

「うん、好きにしていいい」

「お前は誰だ！」

のんびり会話を楽しんでいるときに、耳が痛くなるほどの叫び声が空気を切り裂く。僕と『僕』は一瞬「うわあ」と耳をふさいだ。声

の主たるいじめっ子の一人は、妖怪でも見たような形相でこちらを見ている。その手には開かれたハサミが握られていた。

「おい、あれ」

『僕』はそのハサミを指さして言った。

「あれでいつもズダボロになって帰って来てたわけ？」

「そう。僕はダーツの的代わり」

「いじめ問題も深刻になったなあ、まるで殺人じゃないか」

そう、僕はこいつらにいじめられていたんだ、昨日まで。

けれど、今はこんなにも臆せず堂々と口に出して言える。連中を怖がらない。いじめがどうか、そんなことはもはやどうでもいい。

その男子は手に持ったハサミを、いきなり僕めがけて投げてきた。回転しながら飛んでくるハサミを僕ら二人は間一髪で避け、『僕』は唾を飛ばしながら「俺まで巻き添えにすんじゃねえよ！」と叫んだ。

第二球はなかった。クラスメート全員が反対側の壁に集まり、こちらを幽霊でも見るように凝視している。そんなに珍しいのだろうか、『僕』が。

気づいていないだけで、空きケースは教室中に転がっているのに。ラジカセがクラプトンを奏で続ける。僕はもつと強く生きなきゃいけない、そして前に進まなきゃならない、なぜなら僕は天国にはふさわしくないから。どうしてこんな時に、こんな歌詞の曲が流れてくるんだろう。

ずっといじめられていた中学三年間。高校受験にも身が入らないし、いつも一人で殺人まがいのいじめに耐えてきた。血まみれになり、必死で言い訳しながら、本心に背を向けて生きてきた。いじめは無くすべき、なんて声高らかに叫んでも現実は一向に改善されない、それどころか年々、いじめのレベルはより高度に、残酷になった。今の中学生はクラスメートが一人死んだぐらいでいちいち何も思わない。ましていじめられっ子なら、死んでくれてありがとうと仏前でお辞儀するような状況だ。

全ては綺麗事に過ぎない。いじめなんてなくならない。

透けて見える偽善をもって「いじめをなくそう」「相談できる環境づくりを」なんて言う奴が一番、いじめられっ子の敵だ。近づいたくもない。むしろたまに「いじめられる側にも原因がある」というのは正論の時もある。

殺人鬼となった中学生は理由もなく、あるいは「つまらない」「ムカつく」「鬱陶しい」そんな理由をもって、クラスメートを殺す。小難しく考えなくていい、ただそれだけのことだ。ぐだぐだと論理を並べる必要はない。当然のようにそこにあることで、多少減った増えたりはあるものの、消えることはない。全ての教室に焼き付けられた光景。破ることもままならない、ありふれた写真。越えられない、壁。僕の記憶に一生寄生して魂を食いつくす、中学生の道楽。

いじめに耐えることを覚えた人間はみんなカメラを持っている。そしてそれを大事に抱えながら、抑え込んだ感情をフィルムケースに閉じ込める。

それが良かったのかどうかは、今の僕には分からない。選択肢に正しいなんてものはないのだろう。要は、選んだ選択肢を正しくすればいいだけで。

なぜなら僕は、天国にはいられない人間だから。ラジカセが呟き続ける。

「どうするよ？」

新しいおもちゃに飽きた子供のように、『僕』が苦笑しながら尋ねる。僕はしばらく何も言わず、怯えるクラスメートたちをじっと眺めた。こうして見ると滑稽なものだ。僕はこの三年間、色々と無駄にしてきたのかも知れない。

「どうもこうも」呆れて目を伏せ、僕は隣にいる『僕』に笑いかけた。「何のためにお前をここに連れてきたんだ？」

『僕』は一瞬、不意をつかれたような表情をして、しかしすぐに子供のようにながら笑った。「違いねえや」と言って、左手を振り

かざす。どこから持ってきたのだろうか、そこには昨日両親を殺した包丁が握られていた。僕の右手にもすでに全く同じ包丁がある。確かにその時感じた、母が使い慣れた包丁の持ち手の感触。

もう、こんな思いはしたくない。

クラスメートが一齐に叫ぶ。お化け屋敷でよく聞く嬌声。面白かった。僕と『僕』は腹を抱えて笑いながら、包丁を握り直した。小指の側に刃がくる持ち方。そのまま上下に振りおろせばどこだって刺せる。

ラジカセの旋律が、雹のように降り注ぐ。

「知らなかっただろう？」

三度目の質問をするが、みんな叫ぶばかりで誰も答えない。

僕だって知らなかったんだ。いや、知ってたのだが、知らないふりをしていた。

そうすることに慣れていったんだ、僕は。

二人で包丁を前に突き出す。四十人分の悲鳴。僕と『僕』は口の端で笑いながら目で合図した。「さようならを言わないとな」と、彼の瞳が語っていた。

だって、彼はもう光を浴びてしまったから。偽善にまみれた人工の光の元では、フィルムは漆黒に染まってしまふ。それを分かっているが、『僕』はここに立っている。

僕らは同時に駆け出した。机の間をすり抜けて、隅に逃げた四十人のクラスメートたちと距離を詰める。誰もが腰が抜けて動けないらしく、各々が恐怖に硬直したり、叫んだり、立ち尽くしたり、頭を抱えたりする。僕らの息はぴったりで、踏み出す足や走る速さまで同じだった。きっと、涙を流しても、雫の数まで齟齬はないだろう。ハサミを投げつけられた。ペン先で僕を的にダーツをされた。公開オナニーをさせられた。後輩をレイプしろと言われた。恐喝された。持ち物を全て壊された。ノートも教科書も破られた。鯉の池に突き落とされた。体育の間に制服につぶれた青虫を大量に入れられた。携帯電話を真つ二つに折られた。学校裏サイトに根拠のない噂を流

された。真冬に氷水をかけられた。口の中に火のついた煙草や精子まみれのコンドームを突っ込まれた。教室の窓から落とされかけた。冬場のプールの腐った水に沈められて押さえつけられた。机に花瓶と仏花が置かれ、葬式だと言ってみんなが「旅立ちの日に」を歌っていた。

全部、僕が写真に焼き付けて、部屋に幾重にもかけられた紐に吊るしてある。それを毎日眺めながら、僕は『僕』と一緒にいた。

ギターに繊細な囁きが重なった。あのドアを開いた先に、真の安らぎがあると信じてる。

いじめ、楽しかっただろう？ けれど、何も知らなかったんだろうね。

僕は心の中でそう呟きながら、包丁を振りかざす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4192j/>

白黒写真

2010年10月28日00時59分発行